



海外研修コラム

教師および生徒の原文を生かして掲載しておりますので、
一部表現のばらつきがありますがご了承ください。

〈第二回派遣前研修〉

研修1：photo language

様々な写真から状況を読みとりました。

■ タイのある家の外観の写真を見て

「この家はみなさんにはどのように映りますか。中の様子はどうなっていると思いますか？」

窓ガラスがない。中は暗い。入り口があるがドアはない。家具がない。藁挽き屋根。一間。電気がない。壁に穴があいている。

■ 家の中の写真

想像していたものとどう違うか確かめた。実際、家の中は壁からの明かりを取り入れて明るかった。壁は簾のような材質であった。主人（おじいさん）がいろいろで料理を作っていた。

■ 同じ家の天井の写真を見て

「写真に写っているものは何でしょうか？」

櫛、ハンガー、歯ブラシ。必要最小限の日用品と、飾りであるリスのしっぽがうまく配置されていた。天井はあまり高くなく、全てが、手の届く範囲に置かれ、用事がすぐ済ませられるように工夫されている。

■ 上三分の2が隠されたニカラグアの写真を見て

「隠れているものは何でしょうか？」

色々な意見が出されたが、正解は車を押している7人の姿であった。

「この中の一人が発した言葉は何だと思いますか？」

「一人じゃなくて良かった。」

■ セネガルの写真を見て

「この写真はどんな状況を表しているか？」

日常的な食事の風景。

■ 全ての写真に共通して言えること：

- ・カメラ目線ではなく自然体である。
- ・無理に笑顔を作っていない。
- ・ピースなどをしていないが和やかな状況が伝わってくる。

■ 現地で写真の写す際の注意点：

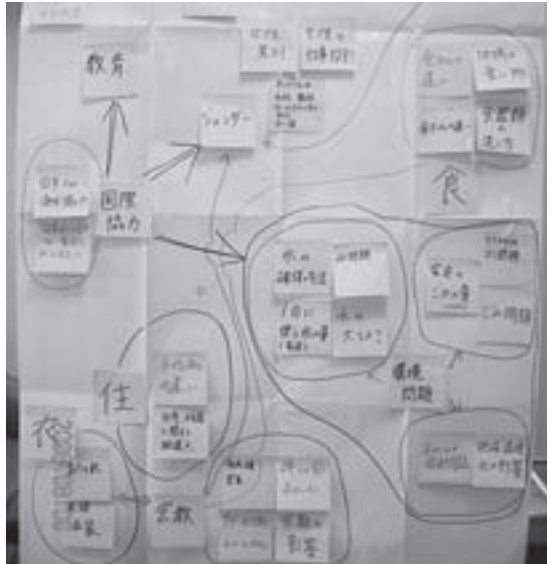
何かしている写真を撮る。自然を切り取ったように撮る。一人ひとりがテーマを決めて、目的意識を持って撮る。肖像権のことを考えると斜めから撮るなど、アングルを考える必要がある。

■ 研修2：今回のネパール研修を通して日本の生徒に何を伝えるか。

〈ブレンストーミング〉

2つの班に分かれて一人ひとりが付箋紙に、重点的に見たいものや知りたいことを複数書いて、模造紙に貼り付ける。全て貼り終えたら、グループ分けをして、グループごとにタイトルを付けてそれぞれのつながりについて話し合う。その後、それぞれの班が発表をした。

今回の研修の視点については、衣・食・住、3つの環境問題(水・ゴミ・地球温暖化)、宗教問題、ジェンダー、教育、家庭生活、国際協力、宗教、幸せとは何かが挙げられた。それぞれの項目が複雑に絡み合っているような印象を受けた。



■ 研修3：阿波踊りの練習

現地交流会での出し物である阿波踊りの練習を行った。

8月10日(日)

記録者：香川 敬子

○関空→タイ・バンコクへ

空港からホテルへの道は緑も多く、草むらでは放牧も行われているなど、のどかな風景が広がっていた。

走っている車は日本車、中でも特にトヨタ車が多かったようだ。新車のような綺麗な車が多く見られた。

はじめめているなと思ったら、突然のスコール。タイは雨季のようである。国王や王妃の絵が所々に飾られており、王制の国であるということを実感した。



タイ空港にて

8月11日(月)

記録者：岩田 直美

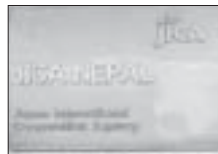
○バンコク→カトマンズ

JICA事務所訪問・事務所長宅での会食

<発見したこと・学んだこと

⇒それを何につなげるか？その他所感>

今日から8日間を過ごすネパール初日。事務所にてJICA事業・ODAに関するブリーフィングとサバイバルネパール語レッスンを受ける。



【JICA事務所長講話】

- JICAの活動は、日本の産業を成り立たせるためにネパールを利用するという考えからではなく、あくまでもネパール人による国づくりを目ざし、最終目標は、この国がJICAを必要としなくなることである。
- ネパール人との関係は上下関係ではなく、活動を通して双方が学び合っている。現地の者だけで考えが行き詰まっているところへ、日本人が触媒効果を発揮することができる。また、日本人も活動を通して器を大きくして帰っていくことができる。
- JICAの活動をネパール国内にも日本国内にも発信していくことが、国際理解、国際協力とはなんぞやということを確認していくことだろう。合田団長より、「日本代表で来ているという気持ちを忘れず、五感を駆使して『サンガイ ジュネ コラギ (みんなのために生きる)』の精神でこの研修に参加したい。」という挨拶があり、一同今回の研修の目的を再確認した。そしてこの日以降、何度でもJICAがこの国で尊敬と感謝の念を持って認められていることを知るようになる。

【サバイバル・ネパール語レッスン】

名前の言い方、挨拶のことば、覚えておくと便利な慣用表現など教えていただいたが、なかなかカタカナで書かれた発音が耳になじまず、悪戦苦闘した。今後現地の言葉をどれくらい使うことができるだろうか。またちゃんと通じるだろうか。少し不安になる。

【JICA事務所長宅にて会食】

たくさんのお料理とお酒を用意して歓迎してくださった。事務所で働かれている方々が今に至るまでの過程をお話してくださり、異文化の中における自己表現方法や、国を越えて協力して働くことの難しさなど、実体験されている方ならではの話をたくさんお聞きすることができ、貴重な時間だった。⇒若い方が生き生きと国際協力活動をしている様子が伝わり、この研修中に見る協力隊の方の声や様子をぜひ生徒に伝えたいと思った。

8月12日(火)

記録者：木村 尚子

訪問先：JICA事務所、ラリットカラヤン小・中学校、教科書センター

【JICA事務所にて】

・安全管理のブリーフィング（津森所員） ネパールの略史

2008年4月に憲制議会選挙が実施され、この8月15日に新しい首相が決まるということであった。信号はカトマンズには10か所、それも管制統治されておらず、交通警察が指導しているとのこと。

ネパールの交通事情は研修中に何度も身をもって体感することとなる。

・教育分野についてのブリーフィング（柴垣所員） ネパールの義務教育は0年ということにまず驚いた。小学校の教員資格は、SLCというテストに合格すれば15歳くらいで取れるという。ここにも、教育の質的な問題が感じられた。全ての子どもに無償の初等義務教育の就学と修了達成を目指している。

・環境分野についてのブリーフィング（立田調整員） カトマンズ盆地における人口増加と廃棄物管理システムの機能不全により、道路、川岸等にゴミが多い。

JICAは、シストル短期処分場の建設、5市の人材育成、カトマンズ盆地長期処分場の建設計画という支援を行っている。

【ラリットカラヤン小・中学校視察】

視察第1校目である。少し緊張しながら門をくぐる。学校をあげての大歓迎ぶりに感動を覚えた。シニアボランティアである岡さんのクラス(キンダー)を見せていただいた。ラインウォークによる集中力の育成、地震に備えての避難訓練、健康診断の結果を持つての家庭訪問等、現地の先生方と協力し、家庭のような環境をつくり、子どもたちが学校に通えるよう全職員でサポートしている点に、これからのこの学校の発展を感じた。



習字のお土産

ラインウォーク



8月13日(水)

記録者：佐々木 広子
佐野 智子

訪問先：サンタクリシュナ小学校
(ナマステ体操見学)
マナバ特別学校
バギスワリ高等学校
JICAボランティアとの会食

<午前>

Santa Krishna Primary School

香川県出身の酒井直之SVが考案したナマステ体操は、ヨガとネパールダンスを組み合わせた日本版ラジオ体操のイメージ。考案に深く関わりSVもお世話になったケサップさんのすばらしい指導で子ども達の動きが急に活き活きとする。

我々の阿波踊りも披露しながら、3度のナマステ体操で日頃の運動不足も解消した。



ナマステ体操

Manaba Special School

生徒約25名に花束と太鼓で迎えられると、校舎の壁面にはネパールの学問の神様とミッキーマウスが見事に描かれ、とても明るい校舎に全員が驚嘆の声。「大きなかぶ」の劇の発表もあり、全員一斉のかけ声で大盛況。「歩くことも話すこともできなかった息子が話せるようになり、友だちと遊び、国の代表としてサッカーの試合にも出場できるようになり感謝している」という母親の言葉が心にしみた。



大きなかぶの劇

<午後>

予定よりかなり遅れてmanaba特別支援学校を出発。しかし再び、途中でトラックが脱輪して道をふさいでいる現場に遭遇。30分ほど立ち往生。

Bai Miki Secondary Schoolでは英語の授業を見せてくれる予定で、生徒たちが私たちの到着を楽しみにしてくれていたようだが、やむなくキャンセルで次の視察先、Bagiswori Higher Secondary Schoolに到着したのが4時半近く。生徒はほとんど下校した後だった。



トラック立ち往生

Bagiswori Higher Secondary School

公立学校の中でも人気No.1で幼稚園からカレッジ(12年生)まであり、在校生は合わせて2700名。ネパール中からこの学校に入りたくてやってくるという。施設も充実しており、高学年の授業はすべて英語で行われる。SV篠原さんが情報教育のサポートで短期間ではあるが支援を行っており、IT教育についての事情を聞く。



<卒業生も同席して>

夕食

世界遺産のひとつ、バクタブルの遺跡を見ながら、JOCV、SVの皆さんと会食。和食がうれしい。

会食に参加してくださったのは、湖月さん(JOCV現職参加の京都府の先生)、亀井さん(JOCV)、江守さん(JOCV)、高橋さん(JOCV)、篠原さん(SV)、小林さんの皆さんでした。

訪問先：JICAプロジェクト「子どものためのコミュニティ主体型ノンフォーマル教育プロジェクト(CASP)」現場視察

① パンチャカンニャ

Lower Secondary School (公立)

視察の前に近くの公立学校を見学した。6～8歳が対象だが、この場所まで登校困難な子どもたちが多い。

子どもの足には厳しい山道を歩いてこなければならず、コミュニティスクールが必要。

② Chhaimale Mother School サイト

①の学校から車で15分ほど行ったところから、徒歩で約1時間かけて訪問した。途中、土砂崩れになっているような箇所、道幅が狭いところなど厳しい山道を体感できた。村の方たちによって、危険な箇所は道幅を広げ、歩きやすく踏み固めたりして、子どもたちの安全のために努力されていた。

まず、この学校を訪問して驚いたことは、本当に山の斜面に建っている学校だったということ。子どもたちは勉強が好きで、将来先生になりたい子どもが多かった。また、ヤギ・牛の世話や草刈りなどの家の仕事を手伝っている子どもたちばかりであった。



阿波踊り用に準備していた横笛を、ある男の子が上手に吹くことができたため、笛とマドルという太鼓と阿波踊りのリズムにあわせて、最後にみんなでダンスをした。お土産は万華鏡・絵本が好評だった。

登下校が大変な環境の中で、勉強熱心な子どもたちに感動した。また、日本と違い、山の中に子どもたちが溢れている土地では、このような学校が必要不可欠だと感じた。



③ Bauddha Tinchule

ここでは、様々な理由により就学年齢時に学校に通えなかった子どもたちを対象としており、1~5年生の内容を3年間に短縮した授業を実施していた。公立学校の1室を借り、放課後にあたる15:00~19:00の時間を利用している。電気のない部屋なのでいつも薄暗い環境で授業をしているようだった。また、休みの日を利用して遠足やスポーツなどの行事があることに驚いた。みんなで貯めたお金で子どもたち中心に計画・運営させていた。

④ J.P.FOUNDATION事務所訪問

J.P.FOUNDATIONという団体は1994年からネパールの教育向上のために活動している。本日、視察したような学校に対して、チャイルドプロフィールの作成、月例報告書の作成、家庭訪問の実施などの指導を行っている。しかし、実施できている学校は少ない。現在は簡易給食が出せるように要求しているとのこと。



授業風景1



授業風景2

8月15日(金)

記録者：合田 明典

訪問先：バルミキ中学校, JICA事務所

8月13日(水)にバンダ(交通封鎖)により訪問できなかったバルミキ中学校への訪問と、温暖化問題に関するブリーフィングを受け、2班に分かれてそれぞれ4名ずつが参加した。夕方16時からはホームステイに関する諸注意の後、ホームステイ先に移動した。

★バルミキ中学校★

江守隊員に笑顔で迎えられ、生徒さんに花を次々と手渡される歓待を受けて感激する。一度訪問中止になったところをわざわざ来てくれたことへの感謝の意を伝えられ、一同「来てよかった!」との思いを共有する。自己紹介も7校目ともなると「ナマステ〜。メロナーム……」と皆慣れたものである。阿波踊りも盛況だった。校舎は2階建て。1階は他の学校と同じく教室が薄暗かったが、2階は完成間近の屋根が半透明のトタンでできており、光が差し込み明るいことが大変印象的だった。このような工事も村人が協力して実施しており、地域の大切な学校を自分たちの力で支えようとする姿があった。また、図書室があることを盛んに強調されていた。この学校は幼稚園~8年生までの子どもたちが通っているが、まだ小さい子がお兄ちゃんやお姉ちゃんのクラスの中にいる様子も見られた。「となりのトトロ」のさつきとメイ姉妹を彷彿とさせる。帰りはみんなでクルタを注文したのでした。出来上がりやいかに……。



お花の歓迎を受けました



バルミキ中学校での交流

★温暖化に関するブリーフィング★

JICA事務所において、福田義夫次長より説明を受ける。Tsho Rolpa Glacial Lakeを始め、現在千個ほどの氷河湖があり、その中で200個ほどが決壊による洪水などが懸念されている。現在はデータベースを作成し、下流に早期警戒システムを設置することで対処しているが、教育の充実や交通網の整備などへの必要性も高く、限られた資金をどこにどれだけ投入するのかという優先順位の問題が難しいようである。実は水資源は十分にあるのだが安全に利用できるような貯水ができない、外国の援助で水道を作っても自分たちで維持管理ができずに水質の改善が進まないという説明に、ネパールの水問題の本質を見た思いがした。



福田次長の温暖化講座

★ホームステイについてのブリーフィング★

JICA等の活動を通して日本へ渡航経験のあるネパール人のOBが組織しているJAAN(ジャーン)にホームステイの手配をしていただいております、その事務所で簡単な説明を受けた後、それぞれの家庭に旅立っていった。みなさん、グッドラック！



壁に描かれたヒンドゥー教の女神



農村の風景1



農村の風景2

8月15日(金)～17日(日)

ホームステイ日誌

木村 尚子

【バクタプルにあるパラドさん宅】

◆8月15日

途中、渋滞でホームステイ先に着いたのは午後7時前。日本の田舎の風景とよく似ている。もう薄暗くなっており、家の中も夜は暗い。

家族はパラドさん(父)・ブラバディさん(母)・スリジャナ(19歳)・サララ(17歳)・サンディシュ(11歳)の5人家族。すぐ近くに祖父母、パラドさんの兄弟の家族も住んでいる。チュウラをいただいた後、家族の写真をたくさん見せてもらう。

21:30頃、いよいよダルバートを食す。

◆8月16日

今日は、年に1回お守りを替える日だそうである。朝、おじいさんに手首にドロ(細い紐を巻く。グッド・ラックの意味があるよう)をしてもらい、お母さんにティカをつけてもらう。世界遺産に登録されているチャング・ナラヤン寺院に行き、その周辺を歩くのが今日のスケジュールである。10時半頃に家を出て、途中にあるご神体にお供えを置きながら、1時間かけて歩いていく。

サンディシュが19時前、フットボールをしないかと誘いに来る。狭い庭で、しかも薄暗い。電気照明の明かりはない。親類の男の子やお兄さん、サララも混じり、ボールが見えにくくなるまで遊んだ。また、私が寝る部屋(4畳くらい)に家族がよく集まり、21時過ぎまで話をしたり、腕相撲やトランプをしたりして過ごした。兄弟がとても仲がよく、いけないことはきちんとたしなめていることに感心した。一番気を遣ってくれたサララは将来、医者になりたいという。その願いを実現してほしいと切に思った。



◆8月17日

朝、起き抜けに熱いチャー(甘いミルクティーのよう)を一杯。フットボールをしようとまたサンディシュが誘いに来るが・・・。出発前にお母さんのサリーを着せてもらい、一緒に写真やビデオを撮る。サリグラム(アンモナイト)を買いたいと初日に話していたせいか、お父さんがムスタンにトレッキングした際に持って帰ったサリグラムをいただく。感謝、感謝である。ぜひ、授業の中で使いたい。



ヒンドゥー教の神様“ガネーシャ”



市場の様子

カトマンズの北に位置するブダニールカクタ村から迎えに来てくださった、Mr.Ram Bahadur K.C(51歳)は、21年前にJICAの結核対策の研修で日本を訪れたことがある。長男のMr.Niranjan K.C(25歳)は、国際言語学校で日本語を専攻している学生で、語学に不安があった私には救世主であった。

「ネパールでは、ナマステと挨拶をすると誰もが笑顔で返してくれるのがすばらしく、日本語が上手ですね」と話すと、「日本は褒める文化があるから」と「お世辞」について語られたので、一生懸命で本当だと訴えた。

夕食の20時までの間、エイズ対策の秋山隊員が、5年前まで看護師だったMrs.Gayatri K.C(49歳)と親のように話しているのが印象的だった。

食事はおかわりを進められ、「ドレイ ミト チャ」と連発しながら「プギョ」と言わざるを得ない胃袋の状態であった。手食に挑戦する私に、ご主人が目を細めてくださっているのがうれしかった。女性はテラスの地べたに座して食事する事が多く、ご主人は菜食主義者であった。テラスには残飯に集まるハトの巣箱を手作りしてあった。



毛筆に初挑戦

Mr.Niranjan K.Cの友達とともに16日の「ザーナイプール ニマ」、17日の「ガイ サトラ」のお祭りを見たり、仏教の寺院を訪問し、日本の念仏に当たる「オマネ ベメホ」を唱え、お賽銭を供えたりした。

日本語学校関係者、聴覚障害者、絨毯職人等との様々な出会いがあり、聴覚障害者の方が手話を私に語りかけられ、手話付きのカレンダーを部屋から持って来て、プレゼントされた。

Mr.Niranjan K.Cは日本語研修のための来日が決定しており、「日本人は勤勉で、時間を守るすばらしい国民だ」と何度も語った。ネパールの昔の子どもの遊びのドキュメンタリー番組を制作する夢や新政権の政策の動向をじっくり見極める思いを熱く語る様子にネパールを愛する若者の姿を見た。次男のMr.Nirakar K.C(21歳)もアメリカでコンピュータソフトの勉強をする夢をもっており、両親共に就職や結婚も息子の自主性を重んじていると話された。

最終日に日本語で手紙を一生懸命書いてくれたMr.Niranjan K.Cが日本へ来て夢を叶えられるよう精一杯の支援をしたいと感じている気持ちを伝えた。日本へ最愛の息子を送り出す両親に私が約束した、「日本のアマ(母親)」になると。



ふたりのアマ（お母さん）

8月15日（金）

父親はパイロット、母親は空港の管制官の仕事をされている家庭にステイさせてもらった。長男(18歳)は高校卒業後、来年アメリカへ留学予定らしく、TOFLEの勉強ができる塾へ通っていた。3階の一戸建て住宅で、一般の家庭よりもかなり裕福な生活環境である印象を受けた。1階には青年海外協力隊員の方、2階には家族、3階の奥にお手伝い(Domestic Helper)の女の子(16歳)が住んでいた。まだ若い女の子が家族と離れ、一人で住み込みで仕事をしている姿にとっても驚いた。親戚の方の家では、同じように男の子が働いていた。上流家庭ではよくあることらしい。同じ世代であるのに、一方では住み込みで働き、一方が学校で教育を受け海外へ出て行く。この環境の差が今のネパールの現状なのだと感じた。

8月16日（土）

カトマンドゥのダルバール広場、ニューロードに並ぶ土産物屋、露店へ連れていってもらった。

明日の“ガイジャットラ”というお祭りを控え、露店がたくさん並び、大勢の人で賑わっていた。お祝いごとや、お祭りなどのときに女性が掌、腕、足などに描くメヘンディというものを体験してみた。ヘナという染料を使い、固まったらレモン汁・砂糖・油を合わせたもので落とし、一晩ほど置くとよく皮膚に染料が染み込むようだ。現地では出会う人みんな「Beautiful!」と言ってくれたのに対し、帰国後日本人に見せると「気持ち悪い」といわれ、逆カルチャーショックを受けた。



8月16日

この日の夕食は、いつものダルバートよりも豪華で9種類の豆のスープとチキン類が豊富なおかずだった。9種類の豆のスープは明日のガイジャットラの前日に食べるのが慣習らしく、季節の変わり目で健康を願う料理らしい。

8月17日（日）

午後はガイジャットラというお祭りに昨日行ったダルバール広場へ行った。大勢の人が集まっていた。今年1年間で亡くなった人の供養のため、その親族の中で一番幼い子供が仮装のような派手な衣装を着てパレードをする。衣装を着た子供たちに、多くの人がお菓子やジュースを渡していた。同じように家族を亡くした人でパレードのようなことができない人であっても、お菓子を渡すことで供養になるという。私も体験させてもらったが、パレードをしている人とそうでない人との区別がつきにくかった。

貧困層の方も多く、食料の確保に必死な場面に何度も遭遇した。この格差を埋めることは大きな課題だと感じた。

短期間ではあったが、ネパールの家庭料理の作り方・ミルクティーの入れ方、洗濯の仕方などを教えて頂き、家庭科教員としても嬉しかった。

語学に関してはご主人が日本語を少し話せたので片言の英語と日本語で日常生活に困ることはなかった。しかし、もっと英語が話せたら深い意見交換が可能であった。少し体調が悪かったのだが、トイレや食事に気遣ってくださり、とても感謝している。これからも交流を続けたいと思っている。



8月17日

【Karkiファミリー】

これまでにJOCVの方を含め、ホームステイ先として何人か受け入れており、応対に家族だれもが慣れている。Karki夫妻も娘Nikki(19歳)、息子Saswat(14歳)も、自分の用事や勉強が終われば当たり前のように私の部屋に集まってきて英語でどんどんしゃべる。ご飯もそこで食べる。その客人を歓迎するホスピタリティと英語力に感心した。特に英語では、日本の中3の教科書を見て、Class 1・2レベルだと言われたのが少なからずショックだった。

Nikki曰く、「日本は日本語だけでちゃんと発展しているのだから英語を勉強しなくて当たり前。私たちは発展途上だから英語が必要なのよ。」

なるほど、しかし国境を外して同じ土俵に立ったとき、日本人は大丈夫だろうか、この英語力、考えをまとめて積極的に話そうとするコミュニケーション力。

家には12歳のモンゴリアンのムタハと14歳のガネシュという2人の少年がおり、洗濯や料理などくるとよく家の仕事を手伝っていた。ムタハは月100Rsの学校へ通わせてもらい、その代わりに労働を提供。ガネシュは勉強が嫌いで学校をやめたので、逆に給料をもらっているそうだ。みんなで出かけるときには、ムタハも髪に油を塗っておしゃれをしていた。

滞在中が日本のお盆にあたり、親戚が来たり、行ったりで2日間の間にたくさんのネパール人に会った。また、比較的生活水準の高いお家の様子を伺い知ることができた。



【観光など】

スワンヤブナート、ダルバール広場一帯、タメル、日本が作ったというバスターミナルなど、車で本当によく走ってくださった。ネパール中75のdistrictから優秀な子どもたちを集めた全寮制のプダニラカントスクールは日本の大学のキャンパスを思わせる豊かな緑の中に煉瓦の大きな校舎やランチルームがある近代的な学校だった。

またシヴァプuri国立公園は、軍によって森が守られており、森林保護のことも考えられているのかなと少し驚いた。その他、Karkiさんは朝のヒンズー教のお祈りを見せてくれるなど、ネパールの様々な面を紹介するように配慮してくださった。

最後は私のルピーの計算をし、こうやって支出帳をつけなさいと自分のノートを見せてくれたKarkiさん。「誕生から墓場まで人生は旅である。だから出会いを大切に。」というのが、家族や周囲の人や客人を気づかういつも笑顔の彼が心の中に置いている言葉だそう。

感謝。



街の服屋さん1



街の服屋さん2

私を迎えに来てくれたマンディラという15才の美少女に案内されて到着した先は、何と学校でした。彼らは「ASPHODEL PUBLIC SCHOOL」にお住まいだったのです。

3歳児から1～10年生の全13クラス、全校生徒417名の公立学校でした。寄宿舎も併設しており、45名ほどが一緒に寝泊まりをしているようです。ちょうど私が到着したとき保護者会をしており、明日からの祭りのためほとんどの寄宿生徒も一時帰宅する真最中でした。

ブレンドラさん(校長・夫)とビバさん(教頭・妻)の実の子は娘のビプティ(13才)と息子のビナエック(7才)だけで、親がいないマンディラなどを我が子同様に引き取っているグレートファーザー&マザーでした。その他に親がいない子が2人、両親共にサウジアラビアに出稼ぎに行っていない子が1人、地方から出てきていて帰るのに3日以上かかるため居残っている子が2人いて、ネパールの縮図のようでした。

4匹の犬やその他の小動物も自由に住んでいるのですが、私の寝泊まりした居間にも上がってくるのは困りものでした。校庭に備え付けの卓球台があり、暇があれば勝負をしました。

2日目は女の子6人の案内で、手をつないで遠足気分でパシュパティナートへ行きました。今回のネパールでは、私は女性に囲まれる運命にあったようです。ネワール族以外の子ども2人いましたが、みんな本当の姉妹のようでした。大人から子どもまで生活と信仰が自然に一体となっている姿がありました。

最終日はブレンドラさんにスワンブナートとお土産屋さんに連れてってもらい、彼ら夫婦は学校の建物レンタル代を月Rs3500払い、スクールバスのローンを抱えながらも貧しい家庭の子どもたちも喜んで受け入れ、LOVE、PEACE、DUTYを重んじた教育活動をされており、尊敬の念を抱きました。



屋上で洗面や食事・水は地下水をくみ上げ貯水



校庭の風景・めっちゃ上手



学校内の寄宿舎



リッサンビーリーリー



シュレスター家と共に

Mrs. Anila SHRESTHA &
Mr. Shailendra SHERESTHA 宅

主としてカトマンズ市内、タメル地区等で過ごす。

私(佐野)がお世話になったのはSHARESTHA夫妻。お宅はカトマンズ市内の日本大使館と元アメリカ大使館の間にあり、閑静な住宅地。夫妻はここに古くから住んでいるという。

家族は、夫婦と子供4人。でも子供はみな独立して、一人はバクタブルで看護師をしているが、残り3人はヨーロッパで暮らしているという国際派。Anilaさんは女子大の先生、Shailendraさんは地質学者だが、今は退職して悠々自適の生活。家には住み込みのSita Tamangさんと一緒に暮らす。お二人とも日本で1年、または3ヶ月暮らしたことがあり、日本語もお上手だ。

毎日、家に帰宅後はまず屋上でお茶を飲みながらリラックス。お茶の友はパイヤだったり、とうもろこしだったり。そして、夕方7時半ごろに夕食を食べ、早めに休む。そのかわり朝は早い。Anilaさんは普段は4時に起きてシャワーをして、朝食準備。ほとんどがチャパティと呼ばれる手作りのパン。実演して見せてくれた。

7時には学校に行き、仕事を始めるようだ。

私がお邪魔した日はお祭りもあり、2日間とも休みだったが、親戚にご不幸があったとかで忙しそうだった。そのため、親戚の住むタメル地区まで一緒に行き、親戚の学生の2人が市内を案内してくれて、旧王宮やスワヤンプナートを案内してくれた。皆英語ができるので(くせはあるが)それほどコミュニケーションに困ることはなかった。

ガソリン不足の影響があちこちに見られ、交通手段はテンプーやマイクロが中心。テンプーやマイクロなら20ルピーで行けるところが、タクシーなら200ルピー。

日本円にしたらタクシー料金も余り高くないと感じていたが、庶民の足であるテンプーの料金を知ってしまうとなかなかタクシーには乗りづらくなった。

ホームステイを通して、ネパールの生活実情が良くわかった。

滞在しているホテルの贅沢さも。感謝、感謝です。



チャパティ作り



ホームステイ先の家族と

Mr.Iswari Prasad RAJBHANDARI 邸

8月16日

出来事：動物園に行く。お土産として持参した白玉団子作り。

8月17日

出来事：ボダナートへ行く。ヨーモディ作り。

ホームステイ初体験の私にとって、この2泊はとても貴重な体験となった。基本的な文化や習慣の違い、言葉の壁につらさも覚え初日から掛けそうになった。しかし2日間を一緒に過ごすと思議に言葉を越えた交流ができるようになった。初日は動物好きの私のためにお父さんとお母さん、嫁いだ娘さんとその娘さんとの5人で動物園に行った。伸び放題のツタや草の中にいる動物たちは、日本のそれとは違い「見せる」展示ではなかったが、野趣に富んでいて面白かった。往復のバスも明らかに定員オーバーではあったが、この国の車社会を肌で感じるができよかった。2日目のボダナートは世界遺産と言われるだけあり、その荘厳な佇まいは圧巻で、ネパールの歴史を肌で感じる事ができた。

初日は日本からお土産として持参した白玉団子を作った。成形に当たってはお父さんも一緒に手伝ってくれ約80個お団子が完成した。ネパールにもこれに似たお菓子があり、翌日お祭りのために調理するというので、2日目はネパール版お団子ヨーモディ作りをした。香辛料をたっぷり使った餡を筒状にした餅粉の生地にし流し込む。白玉団子のとの違いは中身の有無と茹でるか蒸すかの違いである。ネパールでもきな粉はあるが、個包装で調理済みというのが珍しらしく、すっかり気に入ったお父さんはそれにさらにトマトやにんにくをプラスしたオリジナルソースを作ってくれた。食の好みなどはもちろん各国で異なるが、それを誰かのために作りもてなすという心遣いが嬉しかった。

このホームステイで私が一番感じたのは、地方での暮らしとの格差が大きいということである。山里



で見せてもらった民家は地震にいかにも弱そうなトタン屋根のレンガ作りの平屋。水場はあるが水道はなかった。もちろん冷蔵庫もなければテレビも車もなかった。ステイ先はコンクリートの3階建て。この家の豊かさを象徴するように、家の中には日本製の電化製品が存在した。なんとも言えない苦い気持ちになった。私の日本での暮らしぶりからするとこの家にはまだまだ「足りない」と思うものもある。でも、その「足りない」家にも追いつけない暮らしを送っている人々が多い。もちろんこのような問題はネパールに限ったことではなく、日本でも問題になってはいる。しかし、これらの根底にあるのは日本の問題とは異なる種のような気がする。ネパールの親たちがこぞって子どもを私立学校に入れ、英語を操り立派な職を手に入れることを望むのは、やはりひいてはよりよい暮らしのためなのだろうか。優秀な人材がネパールの外に流れてしまうという話を聞いたが、ステイ先の4兄妹の2人のお兄さんもアメリカとドイツで仕事を持ち、結婚し暮らしているという。ネパール全体の底上げをし、より良い生活を多くの人を送れるようになるには社会的な制度なども充実させていかねばならない。王制が崩れ新しく生まれ変わったネパール共和国がどのような政策の下で現状を打破していくのか、ネパールとの縁が生まれた今、私は傍観者ではられない。



白玉団子



+

ヨーモディ



=

ジャバール団子!?

Battacharya さん宅へ

家族構成はご主人(70歳)と奥様(58歳)のお二人であった。

ご主人は造幣局に勤めておられたが、10年前に退職され、今はお家にいらっしゃる。1976年に日本へ3ヶ月半留学され、主に大阪の造幣局で研修を積まれた。帰国後は、ネパールの造幣局で技術指導を担当されるなど、大きな役割を果たしてこられたようだ。

奥様は大学の准教授である。ご専門は英語教育、英文学で教師歴34年とのことであった。1年間イギリスに留学、ネパールの英語教育の中で中心的な人物である。教科書の執筆や、英語教員の指導もされており、会議もよく開かれて大変忙しいということであった。社会の中では女性に対する差別も少なからずあるという。

二人の息子さんは成人されており、ご長男は結婚されて中東で生活されている。下の息子さんは婚約中でインドのカルカッタに留学中だということであった。

3階建てのお家で前庭も広く果物や野菜が植えられている。バナナ、パパイヤ、マンゴ、グァバなどが実っていて驚いた。バナナはネパールの気候では熟さないで野菜として食べるということであった。茄子がなっていたが、日本のより細くて小さかった。生活の場は2階である。1階は人に貸している。3階は二人の息子さんの部屋と物置である。庭にはヒンドゥー教の祠があり、毎朝お祈り(プジャ)をしている。



ご主人の日本の思い出

お手伝いさんが午前中だけ来ている。早朝来て、洗い物をしたり、朝のお茶の準備や、食事の下ごしらえ(チャパティーの生地作りなど)、洗濯(1週間分のサリーの手洗い)などをしている。

一日拘束すると、彼女の家庭生活に影響を及ぼすし、料理は二人のどちらかが作るの、今の形がよいと奥様が話されており、非常に合理的な考えをするのだと感心した。

英語教育のご専門ということで、執筆された教科書や指導書を見せていただいたり、お話を伺った。ネパールでは教育を始めたとき、ネパール語のテキストがなかったため、英語のテキストを用いて全教科教えていたということで、英語教育の長い歴史(50年以上)を持っているということであった。

日本では全て母国語で授業を行って来ることが出来たため、外国語の学習が母国語の後になり、中国、韓国などと共に同じような問題を抱えているということだ。国全体として英語教育には非常に力を入れており、奥様は専門家としてリーダーシップを発揮され、仕事に対する誇りと自信を持ち、やり甲斐を感じておられるようだ。



ヒンドゥー教の祠

訪問先 JICAネパール事務所

9:30 JICAネパール事務所に到着

■ 参加者を代表して佐々木先生が報告

「さまざまな校種の先生たちと事前にネパールについて学び、それぞれが目標を掲げこの研修に臨んだ。ネパールでは多くの子どもたち、その保護者やいろいろな活動を支えている人々、JICA関係者、ホームステイの人たちなどたくさんの人に出会った。

それらの人々が私たち日本人を歓迎してくれるというのは、やはりJICAを初めとする日本からの支援がそこに根づいているからではないか。私たちはネパールに生きる人たち、ネパールを支えている人たちのことを、日本に帰って子どもたちや同僚に伝える義務がある。今からスタート。研修に関わったみなさんに感謝している。

「ネパールと人の出会いに今がある」

■ 各先生方一人ひとりが所感を述べる

9:55 JICA所長のお話

「学校でみなさんが体験した話をしたらすんなり子どもたちには入りやすい。しかし、これを親戚などに分かるように説明するのは難しい。是非今回の体験をさまざまな人に分かってもらいたい。さまざまな支援の仕方がある。これから始まる。」

10:10 記念撮影 空港へ

【所感】

「一念発起をしてネパールに来て本当に良かった。」ネパールへ旅立つ前の日本で、この研修の最終日にはそう感じるはずだ！とどこかで楽観視していた私が出た。でも、そのことばに込める気持ちの重さは、渡航前の私の想像を嬉しいくらいに裏切ってくれた。それは私に限ったことでなく、この研修に参加したすべての先生方に共通していたということをJICAネパール事務所での報告会で改めて感じた。

校種もさまざま、教科も年齢も個性もバラバラのみなさんが、それぞれの場所で感じたことを自分のことばで話した。短いことばの中に伝えきれないあふれる思いが伝わってきた。参加者全員がこの研修で学んだことをより多くの人に伝えるという使命感に燃え、今日を新たなスタートと位置づけた。そして、この国で出会ったすべての人に感謝した。おそらく私たち参加者が「ナマステ」の次に多く口にしたことばは「ダンネバード」「Thank you」だっただろう。

優しい気持ちになれる国、差し出す手を握り返す国、これから始まる国、ネパール。

「一念発起をしてネパールに来て本当に良かった！
ありがとう」



JICAネパール事務所の皆さんと